

中庁舎には、大多喜の歴史から引用した意匠が数多く使われています。手仕事による様々な造形を探してみてください。



大会議室 梁彩色 / 三蝶



玄関ホール 床 / 方位盤



大会議室 梁彩色 / 双鶴と紅白椿



1 階会議室照明 武田菱



1 階ホール 建具引き手金物 / 紫鯉



玄関ホール トップライト



1 階廊下 トップライト



玄関ホール 建具引き手金物 / 扇子



大会議室 建具引き手金物 / 双鶴



玄関ポーチ 支柱 / 若松



階段室 信楽焼タイル / 太陽・月・星・人工衛星

大多喜町役場

千葉県夷隅郡大多喜町大多喜 93 番地

公共交通機関によるアクセス

いすみ鉄道大多喜駅より徒歩 5 分

東京駅より高速バス

詳細及び自動車利用については、
大多喜町公式ホームページをご覧ください。

<http://www.town.otaki.chiba.jp/>

見学に関する問い合わせ先

大多喜町 総務課

電話 0470-82-2111

発行 大多喜町 2023 年 9 月

図面作成 株式会社 千葉学建築計画事務所
写真撮影 鈴木研一、西川公朗（特記）
夏目勝也、金出ミチル（特記以外）
資料提供 石井肇（☆印）
レイアウト・編集 金出ミチル
印刷 株式会社 さくら印刷

大多喜町役場庁舎



大多喜町役場の中庁舎（旧本庁舎）は、いまいけんじ今井兼次の設計により、昭和 34 年（1959）に完成した。大きな庇のあるこの庁舎は、鉄筋コンクリート造のモダニズム建築の要所に施された多様な材質と意匠からなる工芸的なディテールに特徴づけられる。昭和 34 年度日本建築学会作品賞を受賞。

この後方に立つ**本庁舎**は、公開設計プロポーザルを通して選ばれた、千葉学建築計画事務所が手がけ、平成 23 年（2011）に竣工した。本庁舎は、中庁舎への増築として計画され、連絡橋で繋がる。城下町大多喜に見る伝統的な木造町家の屋根骨組から印象を得た、既存の庁舎に呼応する現代の先駆的な構造で表現されている。

中庁舎は翌年修復され、旧事務室は多目的ホールとして広く利用されている。

建築家今井兼次（1895-1987）

大多喜町役場庁舎の設計を、今井兼次が担うきっかけをもたらしたのは中村茂町会議員であった。昭和 29 年（1954）に町村合併して生まれた大多喜町にふさわしい役所建築を求め、尾本要三町長（当時）と共に直接建築家に依頼に向くことで叶えられた。都会に住み慣れた今井は、初めて訪れた大多喜を「関東の大和」と讃え、随所にこの印象を反映させている。

今井兼次は早稲田大学建築学科で教鞭を執り、早くには早稲田大学図書館（1925）等の設計に携わりながらも、長いこと比較的大規模な建物を手がけることはなかった。大多喜町役場庁舎は還暦を過ぎてからの作品で、この後大多喜町役場と共に代表作となる長崎の日本二十六聖人殉教記念館（1962）や桃華楽堂（1966）を完成させた。

大多喜町役場に繋がる建築思想は、今井が早稲田大学留学生として、1926 年から翌年にかけてヨーロッパに建築を見に出かけた時に始まる。東京地下鉄道からの依頼を受け、日本での建設の参考とするための先進地視察が旅の主目的であった。鉄道でシベリアを横断し、北欧からヨーロッパに入り、フィンランド・スウェー

デン・ドイツ・イタリア・スペインの各地で当時先鋭の建築家や芸術家たちと会って作品の案内を受けた。資料や自ら撮影した写真を多数持ち帰り、発表している。

この旅で深く感銘を受けた建築が、ラグナル・エストベリ設計によるストックホルム市庁舎（1923）であり、今井は後年になっても重ねてこの時の経験を語っている。あらゆる分野の職人たちが建築家と共に建設に関わった点を賞賛し、建築は機能的であるだけでなく、土地の人々の生活を映す作品となる必要性を説く。建物全体に施された多様な工芸美術や木部造作への彩色に注目している

当時無名だったアントニオ・ガウディはもはやこの世におらず会えなかったものの、バルセロナでこの建築家の作品を巡ったことは、大多喜で初めて試みられるモザイク壁を含め、その後の今井作品に大きく影響を及ぼすこととなり、また日本にガウディを初めて紹介するきっかけにもなった。

従来の様式主義から脱却すべく、伝統的な装飾を廃したモダニズムが主流となる中、今井は人間味あふれる建築のあり方を生涯追究し続け、大多喜で実現の機会を得たのだった。



玄関庇 天井の曲線は夷隅川の流れを表す



建設中の大多喜町役場を北西の上空から見る ☆
茅葺屋根を含む町並みの中に、現代建築の庁舎が現れた
上方に城下町の市街地、手前に木原線（現いすみ鉄道）がある



地下大会議室から見る斜面の庭園



多目的ホールに再生された旧事務室

写真 鈴木研一



竣工まもない大多喜町役場外観 ☆



議場を兼ねる地下大会議室には、傍聴席（画面右）を新設

ユネスコアジア太平洋文化遺産賞 受賞

千葉学は、今井兼次の精神を受け継ぎながら、今日的な解釈を加え、新旧の庁舎からなる新たな大多喜町役場を完成させた。この試みは、我が国において始まったばかりであるモダニズム建築の保存再生事例として、内外から注目される。



「天と地の応答」を描くトップライトと東壁



屋上ペントハウスと西壁



西面モザイク壁右下に見る
今井の亡き静子夫人を象徴する
黒牛と竣工年「1959」の銘

舞鶴と OTAKI の文字を
表す屋上のモチーフ

大多喜町役場の建築

大多喜町役場庁舎中庁舎には、今井の建築観が色濃く体现されている。

南面して立つ全長 60 メートルに及ぶ庁舎の西半分を占める事務室は、連なる門型を構成する柱と梁からなる軸組により、奥行 12 メートルの大空間を、間に柱を立てずに構成する。来庁者が利用しやすいように、主だった部屋は 1 階を一直線に貫く廊下に集められた。

議場を兼ねる大会議室は、下階に置かれた。谷間を跨ぐ敷地の起伏を巧みに利用し、玄関から見ると地下になるが、2 面全面を引違いのガラス戸とする室内は明るい。窓越しに斜面に広がる庭園の眺望が得られ、外からは室内の様子が窺える開放的な部屋である。

このように合理的な建築を追求する一方で、軟らかさを感じさせる手仕事の要素が建物全体に散りばめられている。

軽やかな天井を載せた 3 本足の玄関庇では、天井裏に緩やかな曲線を描いて夷隅川を模す。舞鶴城とも呼ばれた大多喜城の城下町としての歴史から引用し、双鶴・扇・三蝶などの紋様を建築細部に施し、要所に立体的なモチーフを配置する。玄関庇南端と庁舎西壁に積まれた荒々しい蛇紋岩は、役場職員自ら鴨川の太海海岸で採取してきたものである。

屋上ペントハウスでは、色とりどりの陶片を用いて理想とする考えのモチーフを描く手法により、各地から集めた陶片を割ったタイルを用いて、大多喜の土地の人々の暮らしを描き出している。後の作品でも展開されるこの手法は、大多喜で初めて試みられた。

このように、建築では合理性だけでなく、人間性をも表現することを求めた今井兼次の思想がここに表されている。

庁舎の修復再生

竣工から数十年経った中庁舎の建物は老朽化も進み、部屋も狭くなり、現代的な事務空間としては不都合な点が多く見られるようになってきた。一時は建て替えも検討されていたものの、夏目勝也を中心とする日本建築家協会の有志たちによる建物を守るための熱心な活動を受けて、大多喜町は既存の庁舎を修復し、北側に本庁舎となる建物を増築して、使い続けることを決定した。

2009 年には公募により設計プロポーザルを募集したところ大きな関心が寄せられ、全国から多数の提案が集まった。公開審査を重ねた結果、千葉学の主宰する千葉学建築計画事務所が最優秀賞を受賞、この事業を担うこととなった。

本庁舎

中心を占める事務室の大空間の天井には縦横に様々な高さの梁が架けられている。大多喜の伝統的な町家建築の小屋組から発想を得た構造は、屋根を支えるだけでなく、空調機能をも備える。天井のトップライトからは、梁の合間から木漏れ日のように自然光が入りこみ、周囲の窓を手動で開閉することで外の風を取り込める工夫がなされ、一日を通しての屋外の移り変わりを感ずることができる。

事務室中央に配置された書庫の上から延びる空中回廊を渡り、2 階の各部屋にたどり着く。

中庁舎建築時には、将来役場を背後に拡張できるように空地を設け、連絡橋に加えその先の空間へと導くベルタワーが建てられた。玄関ポーチから中庁舎を貫き、橋を経て本庁舎に至る軸線が、今日の町役場の背骨をなす。

中庁舎と本庁舎とを繋ぐ連絡橋は、幅を広くして「町民テラス」を設けるかたちで建て替えられた。



遠くからも見えるベルタワーは後方の連絡橋と共に本庁舎（左）と中庁舎（右方）とを繋ぐ役割を果たす。当初から計画された塔は、昭和 44 年（1969）に完成。

中庁舎（旧庁舎）

役場の前面に立つ中庁舎は、本庁舎への門としての役割を担う。今まで事務室だった空間は、多目的ホールとしても使用できるかたちで再生された。普段は保健センターが置かれ、新たに地域の住民や行政関係者の集う場所となった。

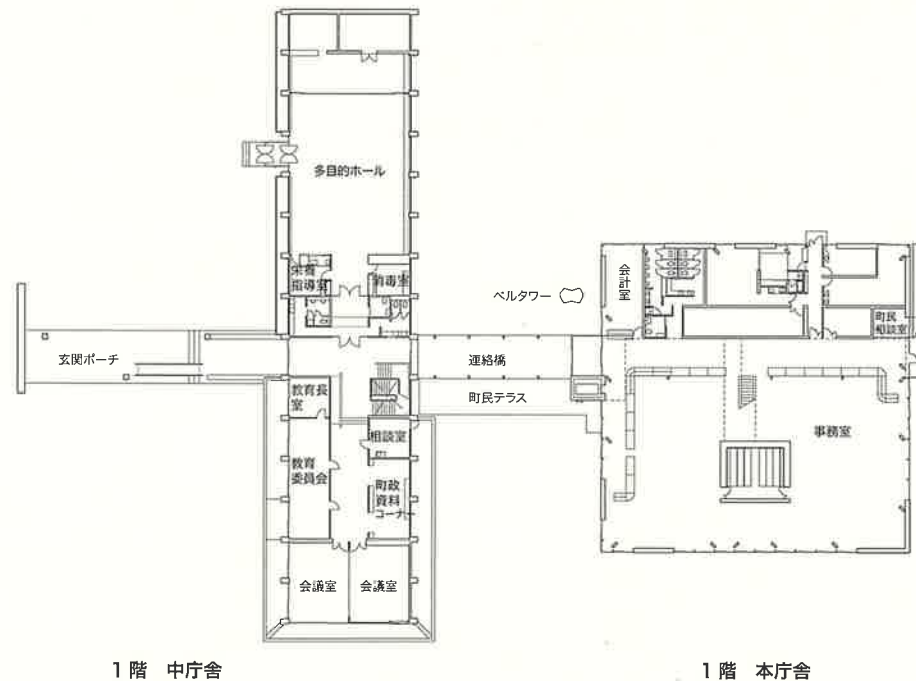
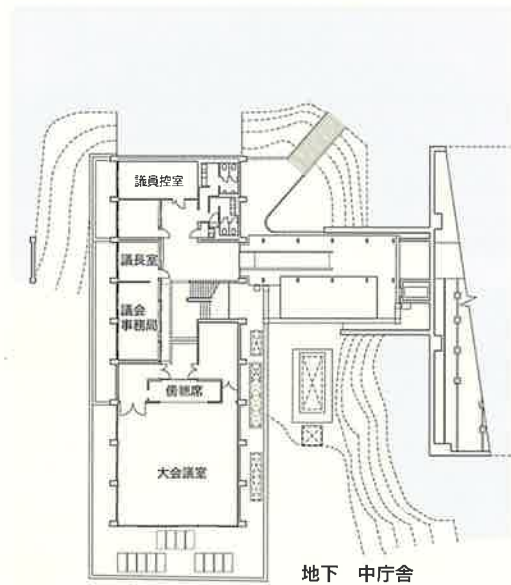
庁舎の修復再生は、建物全体としてできる限り現状を保つように行われた。構造的に弱かった壁の耐震補強に当たっては、補強範囲が目立つことのないよう留意された。外観を印象づける窓廻りのスチールサッシは修理し、ガラスを取り替え、再び使用した。

室内環境を改善するために、断熱材を導入し、空調設備類を更新。既存の照明を修復したうえで、必要な明るさを得るために新たな器具が補足された。庁舎を特徴づける様々な工芸美術からなる細部は丁寧に修復されて、磨かれた。

大多喜町役場

本庁舎	鉄骨造、地下1階、地上2階
設計	千葉学建築計画事務所
設計協力	構造：オーク構造設計 設備：環境エンジニアリング
竣工	平成23年（2011）
中庁舎	鉄筋コンクリート造
	地下1階、地上1階、屋上塔屋
設計	今井兼次
竣工	昭和34年（1959）
修復設計	千葉学建築計画事務所
竣工	平成24年（2012）
施工	大成建設（両庁舎、当初・修復再生共）

1959	中庁舎 日本建築学会賞、千葉県初の受賞
2008	中庁舎 ドコモモ・ジャパン 135 に選定
2012	千葉県建築文化賞 受賞
2013	ユネスコアジア太平洋文化遺産保全賞、 功績賞 受賞 BCS 賞 受賞
2015	BELCA 賞（ロングライフ部門） 国登録有形文化財に登録
2016	日本建築学会作品選奨
2018	ちば文化資産に指定



1階 本庁舎

